



Title	現代市民社会の分裂と集合 : ジョン・アーリの脱組織論から見た現代社会 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	草津, 英律
Citation	北海道大学. 博士(学術) 乙第7054号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70676
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Hidenori_Kusatsu_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：草津 英律

学位論文題名

現代市民社会の分裂と集合

— ジョン・アーリの脱組織論から見た現代社会 —

近代以降、西側資本主義社会では「国民国家」、「階級」というものが社会を見る上で非常に有効な概念であった。だが、70年代以降になると、この国民国家と階級中心の社会観と資本主義社会の現実状況が必ずしも一致しないことが明確になってくる。

この階級理論を形骸化させた市民社会の変化の1つには、ホワイトカラーを中心とした「新しい中間層」の台頭がある。この新しい社会層の台頭は、福祉国家体制下での市民の生活水準の底上げ、生産活動規模の巨大化による経営・管理部門の重要性の高まりに由来する。またこの層は個人主義的な性格をもち、従来の階級区別だけではその位置を正確には把握できない。そして、この新しい中間層は階級に縛られない様々な社会闘争を先導する。では、階級が衰退化した今、近代の枠組みの解体はそのまま混沌的無秩序へと向かうのか。

このような問題意識のもと、筆者は次のことを本論の目的とする。それは国家や階級が社会形成の中核としての地位を失い、社会の不確実性が増した状況下で、個人が依拠できるような市民社会の新しい社会秩序あるいは社会共同性が、はたして存在しているか否かを検証することである。またその場合、それはいかなる形式と価値基盤をもち、どのような経路で形成され、その担い手はいかなる人々であるかを考察することである。

この考察を行う際に着目するのは、70年代以降、資本主義社会で衰退の一途をたどる階級の様相であり、階級の衰退とは逆に台頭著しい新しい中間層による社会共同性の形成の試みである。本論では、それらを検証する理論的枠組みとして英国の社会学者J.アーリによる現代市民社会に関する議論を援用する。そして、彼の議論を現代資本主義社会について論じる諸家の市民社会論とも比較検討しながら、可能な限り新しい中間層による社会共同性について考察する。

本論の第1章「ロックウッズの階級論」では、アーリの社会理論に大きな影響を与えたと推測されるD.ロックウッズの新しい中間階層についての議論について検証する。彼は階級意識というものが生産諸手段の有無により直接的に反映されるものでなく、社会的経験から得た心情あるいは共感の一致や、その過程の中で育まれる文化的価値により事後的に形成されると指摘する。またロックウッズは、ホワイトカラーが自らを労働者階級から分離しようとする個人主義的傾向が、実は、資本主義社会体制の安定化を導くとする。このような社会分裂を促す個人主義が、結果として新しい集合状況を促す逆説的な視点が、ロックウッズの議論に内在する

が、この視点はアーリに継承されているというのが本論の推測でもある。

第2章の「アーリの階級論」では、彼の階級論を中心に考察し、その社会理論の底流にある理論枠組みを検証する。アーリは、すでにその博士論文の段階から、社会が決して確固としたものではなく、個人と社会の相互作用の過程で変容していく動的なものとして捉えている。

また彼の階級論は、ロックウッド同様に非経済還元的であり、また諸個人が所属集団だけではなく所属外集団をも準拠対象にするという準拠の非所属性、複数性を主張する。さらに彼は様々な個人の結集基盤が存在する領域を「市民社会」と呼び、経済、国家とは別の第三の領域であると論じるのだが、市民社会内に諸個人の結集基盤が多数存在することは、社会的不安定を招き、様々な闘争を生み出す。

しかし、彼は、市民社会内部の資本に対する闘争が革命に繋がるのではなく、実際には、その諸闘争は資本主義的構造に吸収され、その存続に寄与するという、いわば「意図せざる結果」がもたらされるとする。その際に重要な意味をもつのが「国家」である。国家は様々な社会政策を通じて市民社会の闘争を統制したのであるが、アーリはこのような社会体制を「組織資本主義」と名状する。

だが、アーリは、国家による経済への介入や、国民の標準化を特徴とした組織資本主義自体も固定されたものでなく、新たな諸個人の抵抗基盤の萌芽を育む過程と論じる。このような国家と市民社会の終わりのないせめぎ合いを論じるアーリの資本主義社会論には「分裂と集合のパラドックス」と名状できる視点が内在していることを本論では示す。

またアーリは70年代以降、この組織資本主義から、経済、国家、市民社会がそれぞれ分裂方向に働き、資本主義社会は「脱組織資本主義」へと移行すると論じる。しかし、本論では、このことを直ぐに論じるのではなく、アーリの議論の社会学における位置も見定める作業をするために第3章「個人主義的な新しい社会共同性」を設ける。この章ではアーリの議論の有効性を見定めるためにポスト・モダン論と再帰的近代化で論じられる新中間層による社会共同性について「分裂と集合」の視点から比較検討する。これらの議論は社会の方向性喪失を論じる点で一致するが、個人主義的な新しい社会共同性についての評価は分かれることをこの章では論じる。

最終章の第4章は「アーリの脱組織化論と市民社会の再組織化」である。ここではアーリの「脱組織資本主義」の議論を援用しながら、サービス階級が先導するツーリズムによる新しい社会共同性について論じる。「労働外の余暇の娯楽」ということから、従来の社会学からは軽視されてきたツーリズムが今では現代社会の文化的中心となり、国境を越えた新しい市民権としての「消費者シチズンシップ」を形成し、新しい社会共同性の土壌になるとアーリは論ずる。

だが、この消費者シチズンシップは「理想」的なものでなく、単一の社会編成原理でもない。さらには消費できる者とできない者の不平等、場所性をめぐる社会分断や環境悪化等の社会問題を新たに呼び起こし、完全に社会問題を解決するようなものではないことも指摘しておかなければならない。

また新しい中間層による社会共同性や消費者シチズンシップなどは、社会変革をもたらす一方で、国家による「助産婦」的な支援と市場の介在がなければ成立せず、そして市民社会がグローバル化するに応じて国家もグローバル化し、市民社会の脱組織化が国家権力のさらなる肥大化を促すという「分裂と集合のパラドックス」がアーリの議論から看取できる。消費者シチズンシップは「強力な国家と強力な市民社会」という相互関係において存在できるものである。

本論は、現代資本主義社会を論じる諸家の思想を「分裂と集合」を軸に整理し比較対照する中で、最終的にはアーリの主張の有効性を検証しようとしたものである。ツーリズムという日常の私的行為から、コスモポリタンの感覚と社会参加の姿勢が生まれうることをアーリが概念化したことには、社会学的な意義を見出すことができる。また本論では彼の理論から「分裂と集合のパラドックス」の視点を見出したのであるが、このことは現代社会をどう捉え、社会がどう形成されるかを論じる際に、社会学的な考察の拠り所を提供するものであると考える。